Osaka University Knowledge Archive

Title	新開陽一名誉教授に聞く ： 大阪大学の思い出
Author(s)	菅, 真城; 阿部, 武司
Citation	大阪大学経済学. 2014, 64(3), p. 81-94
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57034
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【資料】

新開陽一[†]名誉教授に聞く

― 大阪大学の思い出 ―

菅　　真 城[‡]・阿 部 武 司[‡‡]

2013 年 1 月 11 日
於　大阪大学大学院経済学研究科小会議室（大阪府豊中市）

学生時代

阿部　新開先生は，昭和 26（1951）年 4 月に大阪大学法経学部に入学されて，30 年に独立した経済学部を卒業されています。この法経学部は昭和 24 年に設置され，28 年 7 月に法学部と経済学部に分かれたのですから，先生はまさに創設当時の経済学部で学ばれたわけです。まずお伺いしたいのは，当時の経済学部はどういった状況だったのかということです。

その後，先生は昭和 30 年に大阪大学大学院経済学研究科修士課程に入学され，35 年に後期課程を退学されています。この大学院の時代で印象に残っている事柄について，続いてお話しいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

新開　記憶はもう定かではないのですが，一応お話しいたします。

学部の学生というのは，実は先生方のことというのはほとんど分からないわけです。ですから，私も学部学生の時の教員組織とかということはほとんど分かりません。むしろ印象に残っているのは，設備が非常に貧しかったということで，校舎は木造なのですね。歩けばガタガタと音がするというところでやっておりました。それから，図書館も非常に貧しくて，あまり勉強するような雰囲気ではなかったのではないかと思います。

ただ，教員組織につきましては，一つ噂のようなもの，確証はないのですが噂がありました。大阪では，国公立の経済・法律・商科というのは大阪市立大学がほとんど唯一のものだったのですが，特に経済とか商学部はマルクスの先生が圧倒的に多かったのですね。法律はあまり知りませんが。それで，どうも財界の人たちが，マルクスではない法律・経済の学部をつくるほうがいいのではないかということで，いろいろ運動されたと。それで法経学部ができたというふうに噂としてはあります。

そういうことですから，大阪大学にマルクスの先生は 1 人もいらっしゃらなくて，われわれが教えてもらったのは，今から考えると非常に古いタイプの経済学と新しい近代経済学というのがありましたが，マルクスはなかったということです。

ただ，マルクスがゼロというわけにもいかないということで，マルクスの先生が大阪市立大学から 1 人講師として来ていらして，マルクス

---

† 大阪大学名誉教授
‡ 大阪大学アーカイブズ准教授
‡‡ 大阪大学名誉教授，国士舘大学政経学部教授

経済学とはなんぞやという講義をなさっていて，われわれも聞いたわけです。思い出しますと，その先生は少し変わっておられて，教室でたばこをのみまして，たばこの煙がふわふわっと出ていくと，「これがたばこの使用価値である」と。「使用価値」という言葉を使われたのかどうかも覚えていませんが，これと本来の価値とは違うのだというようなたぐいのことを。しかし，聞いているほうは何のことか全然分からなくて，文字どおり煙に巻かれたということではなかったかと思います。

そういう調子で学部は卒業いたしまして，それから私は大学院の学生になったのですが，大学院は今現在とは全然違って，当時はまともな講義というのがないのですね。先生方それぞれ，ご自分の関心がある古典の書物とか，古典でなくても専門書その他を輪読するというのが，ほとんど全ての授業だったと思います。歴史のほうはちょっと分からないのですが。

しかも，今では考えにくいと思いますが，助教授は一切講義にはタッチできなくて，教授の先生だけが教えられていたものですから，新しい経済学なんていうものは，とても大学院生の勉強の対象にはなっていなかったということです。

ただ，私の場合，幸運だったのは，森嶋通夫先生がおられたことです。この先生は，その後，社会経済研究所のほうに移られたのですが，最初は経済学部にいらしたか，あるいは兼任だったかと思います。森嶋先生は，ほとんど独力で，アメリカその他のいわゆる近代経済学の仲間になったということで，経済学というのは，むしろ本より雑誌の論文が大事である，しかもその雑誌というのは日本国内で発行されているような雑誌では駄目で，国際的に一流とみなされている雑誌に論文を載せなければ駄目だというような発想を持っておられた。

ところが，ほかの先生方は，そういうのはほとんど念頭になかったのではないかと思います。私は幸いなことに，森嶋先生からそういう勉強の仕方を吹き込まれたので，割に早くから論文を書けば，いずれは英語で論文を発表しなければならないと考えたということです。

ですから，大学院全体としては古色蒼然といいますか，マルクスではないのですが，非常に古いタイプの大学院でした。しかし，森嶋先生，あるいは若干何人かの先生もいらしたと思いますが，アメリカとつながったような授業があったということです。

それは大阪大学だけがそうなのではなくて，だいたい日本の当時の大学院というのは，ほとんどがそうだったと思います。きちんとカリキュラムを作って講義をするというような発想は，もともと先生方にはありませんし，文部省も法律で決まっているのかもしれませんが，助教授は講義ができないとかいうことがありまして，今では考えられないような状況だったと思います。

授業への取組み

阿部　先生は，昭和35（1960）年に大阪大学経済学部助手に就任され，翌年講師となられて，昭和40年に助教授，47年に社会経済研究所教授に昇任され，その後，昭和59年に経済学部に配置換えになっておられます。

新開　そうですね。

阿部　この間，昭和36年9月から38年8月までアメリカ合衆国ペンシルベニア大学の経済学部客員研究員となっておられます。

つまり，まず経済学部，それから社研（社会経済研究所）と二つの部局に関わられました。その間の教育・研究・社会貢献，それから在外研究等につきまして，印象に残っていることを中心にお話しいただければ幸いです。

新開　昭和40年ごろまでは，私は助手，講師という身分でした。講師というのは，今現在とは違って，ずいぶん地位は低くて，その代わり，授業の負担がほとんどないという状況でし

たから，割に時間的な余裕はありまして，研究をかなりできたという印象です。

それで良かったのですが，昭和44年，その少し前からですが，いわゆる大学紛争というのが起こりまして，とても研究するような雰囲気ではないということで，ずいぶん時間も取られましたし，その後，私個人的には研究のほうが少し手薄になってしまったということがあります。

今から思うと，その紛争が起こるまでは教授の先生がものすごく威張っていて，大学院の授業などは自分たちしかやらないということだったのですが，紛争が始まりますと，これはやはり若い人に活躍してもらわなければならないということで，学生との対応その他，だいたい助教授あるいは講師クラスの人たちが働かされたということです。それで割に働いたので，結局，大学院の講義のほうも助教授にも担当させようかということになってきたのではないかと思います。正確には覚えていませんが。

それで，大学院のことを少し申しますと，当時は，もちろん大阪大学の学部を終えて大学院に来る学生もかなりいましたが，京都大学はマルクスが中心，ほとんどがマルクスの先生だったものですから，学生たちは学部はともかくとして，大学院ではきちんと教えてもらえないのですね。それで，京大の経済学部を卒業した学生が，かなりの人数，阪大の大学院に来るということがありました。その人たちは勉強もよくできますし，熱心なものですから，こちらも教え甲斐があるということで，相当私も熱心に教えた記憶があります。そして，阪大の卒業生も含めまして現在10人ぐらいが，かなり有名な経済学者になりまして，外国にいる方もいるし国内でも活躍しているということで，割に大学院としては，個人的には充実していたという印象です。

しかし学部のほうは，紛争とは別で，私自身はあまり授業に熱心ではない。これは一生そういうことだったのですが。当時を思い出しますと，きちんと時間に行かないのですね。10分か15分遅れていって，やっているうちにだんだん疲れてきまして，また10分ぐらい残して講義をやめるということで，当時はそれほど珍しくはなかったと思いますが，それでもちょっと目立ったのか，とうとう学部長に，もう少し時間を守って講義しろと怒られた記憶があります。

ただ，今と違いまして，例えば休講なんていうのはある意味でし放題というか，理由があれば休講しまして，それで補講をしなければいけないということもなく，牧歌時代といいますか。その一つは，大学院などは，先ほど申しましたようにきちんとカリキュラムがなかったということにもつながるのですが，学部の授業もカリキュラムはきちんとあったものの，非常にのんきにできたということで。

当時，例えば理学部の数学なんていうのはもっとひどくて，有名な先生だと，年に3分の1ぐらい講義をすればいいほうだということでした。そういう時代で，今のように文部省が年間30回やれというようなことを言ってくることはなかったと思います。

それから，社会的貢献というのは，ほとんど意識にもなかったのではないかと思います。例えば，国立大学は社会に対して情報を発信するという考え方自身が，ほとんどなかったということです。時代は少し違うかもしれませんが，年で言いますと，私が学部長をしていたころですから昭和60年代ですけれども，そのころでさえ，文学部が受験生向けのカラーのパンフレットを作って私に見せてくれました。文学部の学部長のほうも「ちょっと体裁が悪いですが，こんなものを作りました」ということだし，見ているほうは「そうか，カラーか」というようなことで，とにかくそれぐらい情報を発信する，それも受験生，父母等にとって分かりやすいようなかたちで発信するという考え方は

なかったのではないかと思います。

ですから，社会貢献というのは，せいぜい公開講座というようなことだったかと思います。私も担当したのかどうか，あまり覚えていませんが。今のように地域と連携というようなことは，ほとんどなかったと思います。

阿部　先生が大学院で教えられていた時に，10人ぐらいで有名になられた方がおいでになったとのことでしたが，具体的にはどなたでしょうか。

新開　お名前ですか。大阪大学にはもういらっしゃらないかな。阪大の学部の卒業生で大垣（昌夫）君というのがいまして，彼は今，慶應にいるのかな。ずっとアメリカにいたのですが。それから，京大の卒業生で，その後，東大の先生になったのが２人か３人。

阿部　岩本（康志）さんとか。

新開　岩本さんが一番有名だと思います。

阿部　あと神谷（和也）さんがおられますね。

新開　神谷さんね。それから京大には柴田（章久）君というのがいた。ほかにも何人か。ちょっと今，名前が出てこないですが，そういう年代の人たち。あまり歳も変わらなくて，今，学界では中堅クラスだと思います。

経済学部と社会経済研究所

新開　それから，社研と学部の関係をどこかで挙げられたと思います。これは普通，何もなくてもセクショナリズムというのがあって対立はもちろんあり得るのですが，それ以外にも割に個人的な恨みというか，怨念のようなものがありまして。

一つ，社研のほうの先生は，当時は学部の講義などはやっておられなかったのですが，割に講義に対しては一家言をもった先生ばかりなものですから，学部のカリキュラムはこうあるべきだというようなパンフレットをわざわざ作りまして，それを学部の先生に配るということで，なんだ内政干渉をやってということで怒ったり。

それから学部のほうからすれば，やはり研究所には国際的に有名な先生が何人かいらしたものですから，ちょっとうらやましいというような気持ちもあったのではないかと思います。そういうふうに学部の講義をせずに研究だけしているというのは，恵まれたポジションだからけしからんという発想があったと思います。ですから，われわれよりも三つか四つぐらい，あるいは七つや八つぐらい上の先生方は，そういう意味で感情的にかなり対立があって，なかなかうまくいかなかったです。

それで，後でも出てくるかもしれませんが，結局，吹田キャンパスのほうへ社研が移転することになりまして，これは普通，学部の近くにいるほうがいいのは常識的に当然ですが，私などはかえって少し距離が遠くなるほうが喧嘩がなくなるのではないかという考え方がありました。確かに，そのせいばかりではないと思うけれども，その後，私たちの年代，あるいはそれよりも下の年代では，ほとんどそういう感情的な対立というのはなくなっていると思います。

今現在，おそらく学部のほうも，ある程度，担当しているのかな。

阿部　いろいろお世話になっております。

新開　そうですね。それで大学院はもちろんやっていると思いますし。ですから，やはり怨念というのは，なかなか政治家でもそうですが，学者の世界でも簡単には解消できないということだと思います。

在外研究

阿部　先生は講師をされていた時期にペンシルベニア大学に在外研究員として２年行かれたわけですが，そこで非常に大きな学問的成果をお上げになったというふうに私どもは伺っています。

新開　そう大きな成果ということはないのですが。その前に，ペンシルベニアからクライン

（Lawrence Robert Klein）さんという先生が阪大に滞在されておりまして，これは私はタッチしていませんでしたが，いわゆる計量経済モデルというのを，大きなのをつくろうということで，クラインさんがアドバイザーで来られたんです。それで，中心的な役割を果たしたのは小泉（進）先生だと思いますが，それ以外でも何人かの先生が。

その時に，非常に規模の大きい計量経済モデルをつくるということで，クラインさんの目から見れば，おそらく野心的すぎると思われたのではないかと思うのですが，それで規模が小さくて，実験的に，パイロットと称していましたが，それをやりたいとクラインさんが言い出しました。ところが，小泉先生その他は，その大きなモデルのほうで手一杯ですから，私が指名されて，おまえがクラインさんの助手をやれということになりました。

それでパイロットモデルというのをつくりましたが，それが意外に有名になりまして，日本でもアメリカでも，ある程度，よく知られるようになったと。それが縁結びになりまして，クラインさんから，アメリカに来て，自分の，共同研究とは言いません，助手のようなものですか，やらないかということで２年間行った。幸い講師で，ほとんど授業の負担がなかったものですから，割に自由に行けたということであります。

当時は日本とアメリカとの生活水準の差がものすごくありましたので，給料は安かったけれども，それでもかなり日本からすれば楽しい生活ができたということであります。これは大阪大学とはあまり関係ないことですが。

教授会のあり方

菅　少し話が戻るのですが，大学院の授業とかは教授の先生ばかりだったのが，紛争ごろを境に変わってきたというお話があったのですが，教授会に助教授の先生が出られるようになったのも，そのころのことでしょうか。

新開　いえ，教授会というのは教授だけの教授会と，全員，講師以上が参加している教授会がありまして，講師以上が参加する教授会というのはかなり早くからありました。ですから，これは紛争とは関係なかったのですね。

教授だけでやっていたのは，おそらく人事だったと思います。それは紛争後もあまり変わらず，助教授の人事は助教授を含めてやりますが，教授の人事はもちろん教授だけでということでやっていました。

阿部　それは今でも同じですね。

新開　そうだと思います。

阿部　今でも先生がおっしゃったとおりで，普通の教授会は講師以上です。ただ，人事をやる場合には，助教授の人事ですと講師の方に退席していただいて，教授の人事は教授だけでやるというやりかたでして，今もまったく同じです。

新開　そうですね。

阿部　そうすると，経済学部は最初から現在と同じように教授会を運営していたということですね。

新開　そうです。私が記憶する限りはそうでした。

ちょっと面白いのは，その紛争を機会に民主化とか何とかという話があって，その社研のほうは助手まで教授会に含めて，しかも教授の人事も助手も含めてやるということを少しやったのですが，やってみると，やはりうまくいかないのですね。特に助手の人たちというのは，われわれにそんな責任を負わされたのではたまらないということで反対をして，結局は同じことになったと思います。つまり上級人事にはタッチしないということになったのではないかと思います。社研のように，そういう風潮もなくはなかったのですが。全員が参加というようなことですね。

大学院のカリキュラム

阿部　もう一つ伺いたいのは，現在，理論・政策系（経済学）のカリキュラムは，ミクロ経済学とマクロ経済学とエコノメトリックスを柱とした非常に素晴らしい教育体系になっていると思います。

新開　大学院ですね。

阿部　それをセットにして初歩からだんだん難しくしていくということですね。

新開　はい。

阿部　このシステムは，いつごろからできたのでしょうか。

新開　それは，私が在籍した時は，まだなかったか，始まってそう月日がそれほどたっていなかったと思います。かなり新しいのではないでしょうか。私が停年で辞めたのは1995年ですか。ですから，大学院のカリキュラムが充実したというのは，1990年代以降ですね。

阿部　そうなりますと，大学院重点化からでしょうか。

新開　ああ，関係があるかもしれませんね。これは全国を眺めても，だいたいそういう方向に行っていると思いますが，東大の経済学だけ，最近は知りませんが，一時，学生が指導教授制度反対とか何とか言ったので，先生方のほうも怒ってしまって，きちんと大学院の授業をしないのだという噂がありました。嘘か本当か知りませんが。

しかし，その後，われわれの年代の下の人たちは，アメリカで博士号を取って帰ってくる人たちがずいぶん増えたものですから，やはりアメリカ流にやろうという風潮は全国的に広まったのだと思います。

それでも，私は1回だけ，東北大学の学部に非常勤講師で行った時に話を聞きますと，いわゆる近代経済学の先生は5人しかいないというんです。ですから，いくらカリキュラムを組もうとしても，やはり5人では無理なので，大変苦労するということを言っておられました。

社会経済研究所長として

阿部　先生は，昭和51（1976）年5月から昭和53年4月まで社会経済研究所長を務めておられますが，先生が所長の時に重点的に取り組まれたことはおありですか。

新開　学部長も含めてですが，私は個人的には，何か新しいことをやるとか，改革するとかというのは，どうも性格としてできないものですから，初めからあまりやる気はなかったんです。

ただ，どちらも割に外部からの大きなショックみたいなものがありまして。一つ，研究所の時は，先ほど申しましたように建物を吹田のほうに新しく建てるということ。それは文部省から予算が下りたということなのですが。それで普通ですと，事務に任せておけばだいたいいけるのですが，どうも社研は先生方でうるさい方が何人かいまして，その建物の設計から自分たちがやりたいと。設計と言っても単なる平面図ですが。

それで，かなりすったもんだしたし，それから，あまり詳しいことは申しませんが，最初，吹田のほうの学部と話し合いをつけて，建物の平面図ができていたのですが，それに対して施設部ですね，こちらの事務が，これよりももっといい案があるから，これにしたらどうかというのを提案してくれました。確かに立派な建物ですが，それに対しては吹田のほうのある部局が反対して，すったもんだしました。

施設部のほうもメンツがあるからなかなか引っ込めないし，吹田のほうも，それ以前に覚書のようなものがあったんです。それは私も参加したし，施設部にも覚書は渡しておいたはずですが，ともかくこういう建物は建てないという覚書があった。それにどうも抵触していたらしいんです。しかし，その覚書は新しい施設部長には伝わっていなかったというか，引き継ぎができていなかったということらしい。私自身は，もう忘れてしまっていまして，そういうこ

とでずいぶん時間を取られたという記憶があります。ですから，これは大変な，しなくてもいい苦労をしてしまったということです。

しかも，これは個人的なことですが，私はちょうどそのころに肝炎，肝臓の病気になっていまして，本当はあまり働けない。それは所長を辞めれば一番良かったのかもしれませんが，それもなかなか難しくて，その病気をだましながら建物のことをやったということです。いずれにしても建物は建つわけですから，あまり生産性のあることではなかったのですが，個人的にはずいぶんそれにエネルギーと時間を取られたという印象です。

ですから，何かやったというと，それですね。建物を建てたという。

阿部　社研が移転する前は，ここ（豊中キャンパスの経済学研究科）の場所にあったのですか。

新開　ええ，この辺のどこか，4階の。

阿部　フロアが違っていたのでしょうか。

新開　いや，経済学部の研究室も4階にもありましたし。とにかく狭くてね，不平不満たらたらだったんです。

阿部　先生が所長の時に新しい建物の工事をされて，その間に移られたということでしょうか。

新開　そうです。建物自身はそんなに大きくなくて，工事もそう長くかからなかったので，先ほど言った向こうの部局とのトラブルさえなければ簡単にできたはずなのですが。

阿部　当時は，まだ吹田には何もない状態で，建物がだんだんとできていったのでしょうか。

新開　それでも，かなりありましたよ。もちろん工学部などは大きいし，それからレーザー核融合センターがあって，それは人数などに比べると建物の大きさはすごいものでした。病院も微研（微生物病研究所）病院というのがありましたし。

阿部　吹田キャンパスはもう，かなりできていたということですか。

新開　ええ，できていましたね。

阿部　今小高い所に立派な建物が建っておりますが，それはもうその時に建っていたのでしょうか。

新開　ええ，場所はそのままなんです。それをもうちょっと，別の方角を向けてというようなことだったんですね，その施設部の新しいのは。

阿部　そうしますと，先生が所長の時には，ちょうど建物を新しく建てて，豊中から移られたわけで，重要なお仕事だったのですね。

新開　まあ，これは研究とはほとんど関係ないところなんですが，とにかくずいぶん。おまけに，根回しというのが結構いるんですね。吹田の全ての部局に対して，これでよろしいかということで。初めは全部OKだったのですが，設計が変わった途端に，特定の部局がこれでは駄目だということになったりしましたし，それから根回しでは，工事をすると大学の外側へ騒音が出るというので，市会議員か何かでうるさい人が1人いまして，そこへもあいさつに行って（笑）。

阿部　あの辺りで騒音が出たところで，そう困ることはないのではないかと思いますが。

新開　もう単なる嫌がらせなんです。しかし，必ずその人が文句を言うから，とにかく行って頭を下げてきてくれというようなことでした（笑）。

菅　吹田のあの場所にというのは，社研側の希望だったんでしょうか。

新開　そうです。社研の中でもいろいろ意見があったのですが，大学紛争が一番激しかったのは1969年で，移転したのが1976年，1977年のころですから，とにかく紛争に巻き込まれるのは避けたいという気持ちが非常に強い人が何人かいらした。

今だったら想像が付かないと思いますが，何かあると各学部から何人か動員ということで，

結局は警察が来て何とか対応するのですが，警察のほうは，まず先生が正面に立てとか何とか言うわけです。ですから，こちらも各学部から動員して。そうすると，社研などは学生はいなくても，やはり割り当てが来るわけで，これはたまらんなということでした。当時は，吹田へ行けば大丈夫という印象だったのではないかと思います。

阿部　その当時，社研は大学院生とも関わりがなく，研究だけを先生方はやっておられたのでしょうか。

新開　個別に交流はしていると思います。しかし，指導教授になるということはなかったと思います。ですから，単なるお手伝いだったと思います。そしてその後，研究科委員会に社研の先生が，形式ではなくて，きちんと実質的に入るというのはかなり後だったと思います。

阿部　今，何年かは覚えていませんが，その時の教授会のことは記憶しております。

経済学部長として

阿部　先生は昭和59（1984）年に経済学部にお戻りになっていますが，それには何か事情がおありだったのでしょうか。

新開　いえ，もう研究所というのは要するに研究をするのが義務ですが，歳を取りますと経済の理論とか，あるいは計量経済学というのは研究があまりできないのですね。そうしますと，やはり学生を教えているぞというアリバイづくりのようなものがあるほうがいいという気持ちが一つありました。

それと，社研の場合は人数が少ないから，割に簡単に所長の順番が回ってくるんです。私ももう所長はこりごりだと思ったものですから。それで経済学部のほうでも，社研で所長をやったから学部長にならなくていいという了解を取ったつもりで移ったのですが。

阿部　すぐにおなりになっていますね（笑）。

新開　まあ，これは単なる口約束ではしかたがないものですから。

阿部　昭和59年に移られて，翌年7月から2年間経済学部長をお務めになっていますね。

新開　そうです。この時，改革というのは，私の前任の畠中（道雄）先生が大改革を幾つかされたのですね。私も今それは思い出せないのですが，おそらく学部としての入試のやり方を変えるとか，まあやり方といってももちろん枠はありますが，その他いろいろなことをやって，感じとしては，もう先生方は改革に疲れたということで，決まったことはずっとやっていくけれども，もう新しくやりたくないというような雰囲気はあったと思います。

それで，改革なしでいこうということで始まったのですが，入学試験につきまして，かなり大きな出来事が起こりまして。お若い方はあまりご存じないのではないかと思いますが，中曽根（康弘）さんが，どういうことなのか知りませんが，当時の言葉ですと「受験機会の複数化」というのをやりました。もちろん，初めは別の案が出ていたのだろうと思います。私は細かいことは全然知りません。

いわゆる国大協（国立大学協会）というところで国立大学の学長が集まって議論するのですが，それでいくらやっても成案ができないし，しかも時間をかけずに次の年度からすぐやるというようなことであったものですから，結局，全国を東と西に区切りまして，例えば名古屋大学は西，それ以外，東のほうは東と。

それで，かなり短い期間で入学試験をやるのですね。1週間ぐらいだったと思います。そして合否を発表する。もちろん，どちらにも通る人もいれば，どちらにも落ちる人もいて，結果を見てから学生が選ぶということで，抽象的にいえば，なかなか学生にとってはいいと思うのですが。

しかし，それまで入学試験というのは，それも若い方はご存じないと思いますが，一期校と二期校というのがありまして，一期校というの

は，どちらかというと偏差値の高い大学，二期校というのはそれほどでもないのですが。それで，一期校はある日に入学試験をやりまして，その合否を決めてから二期校の入学試験をやるということ。

これがいいかどうかは別です。二期校の先生方にとっては非常に不愉快なシステムだと思うけれども，一応，秩序はできていまして，それがずっとそのままきていたのに，突如，今言ったように全国を東と西に分けてしまって，ほとんど同時に入学試験をやり，両方を受けることができると。

これは当時理解できない先生がたくさんいたと思うけれども，少し考えれば，両方を受けて選ぶわけですから，辞退が続出するわけですね。しかも，普通だったら過去の実績で何となく見当はつくのですが，大きく変わったから過去の実績は一切参考にならないということで，手がかりがないままに新しい入試をやることになりました。

私は個人的には，学部長になった途端に全学の入学試験委員会の副委員長でした。委員長は総長ですが，総長は実際には働かないので，副委員長が全体をまとめよということで非常にやっかいな役になりました。ほかの先生方はそれを分かっていて，自分たちはそれをやりたくないから，事情を知らない新開に学部長をさせておこうということだったのではないかと勘ぐっています。

それで，しかもその新しいところで，今言ったように辞退者が続出するということもありますが，それ以外にも細かいところを全部一から決めていくわけです。入学試験のやり方も。ですから，事務のほうも大変。入試担当の入試室というのがあったと思いますが，その委員会のほうも結構大変でありまして，それにほとんど時間を取られました。

ですから，経済学部自身の入学試験というのは，経済学部の，例えば学部長がそちらに手を取られているからと，評議員とか，あるいは入学試験の委員がやってくれるはずなのですが，私の不徳の至りというか働かないのですね。評議員も入試委員というのも。こんなのは分からないから学部長に任せておこうとかいうことで。ですから，それで本当に大変な思いをしました。

しかも，文部省のほうが，とにかく定員割れを起こすなと言いますし，学内のほうは，これは教養部が中心になって定員以上絶対に合格は出すなと。それで辞退者が出ることは見えているのですが，定員以上は合格者を出すなと，補欠を決めておけばよろしいという理屈でした。それしかしかたがないのですが。

それで，補欠を何人決めておくかというようなことも，過去のデータがない。ですから，本当は頼りになるのは予備校などがやっているアンケート調査ですが，ところが阪大の場合，あまり書きたくないのですが言いますと，雰囲気として予備校のデータなどは一切使うなというものですから，どうも支障があって。

ですから，私は経済学部に関しては自分で方程式を作って，どれぐらい辞退者が出るかをメノコ算で計算しました。これは歩留まり率とかと称していますが，合格を幾ら出せば，どれぐらい辞退が出るか，しかも合格を出せないのだったら，補欠を何人取っておけばよろしいかというのを計算しまして，今から考えると信じがたいのですが，定員が 200 人だったら 200 人ぐらいは辞退が出るという計算なのですね。ですから，少なくとも 200 人ぐらいは補欠を取っておかないと。

ところが，それを言うと教授会は「そんなばかなこと」とか何とか言って，なかなか賛成しない。しかし，結局ふたを開けるとそれぐらいでした。ちょっと定員は覚えていませんが，200 人ぐらいだったと思いますが，200 人の合格を出すとほとんどがいなくなるということで，これは本当に大変なことでした。

そして，今度は経済の事務のほうが，その補欠の上のほうからずっと電話をかけて，「入学しますか」ということをやるのですね。そうすると，なかなかつかまらないのもいるしということで，事務のほうも大変だったと思います。

これに時間を取られたし，もう詳しくは申しませんが，その次の年がまた大変でした。私は次の年の８月で任期が切れたのだと思いますので，８月までは一応学部長だったのですが，京都大学はそういうシステムから抜け出しまして，京大は独自にやると。独自といっても，結局，東大と同じ時期にやるということですが。そうしたら，それこそ京大以外の西のほうが，もっと計算が立たないということになって大変だったんです。それで学内でも大げんかをやりまして。

理科系の先生というのは，意外に危機感がないというか，それほどたくさん辞退者は出ないようですね。これは笑い話ですが，阪大には歯学部というのがあります。いわゆる旧帝大では歯学部はほかにはないそうで，歯学部の先生は「阪大の歯学部は歯の東大だ」とか何とかいって，「辞退者はゼロだ」とか言っているんです。それで私は「それはそうかもしれないけれども，医学部と掛け持ちする人がいるから必ず辞退者は出ますよ」と言っているのに，「いや，大丈夫」とか言っている。

実際そうなんですね。ほかの大学の医学部と歯学部と２回受けて，どちらにしようかと。医学部に落ちれば歯学部に行きますが，医学部に通れば医学部に行こうという。ですから，大量ではないけれども辞退者はいるんです。しかし，そんなに定員全部が辞退するというようなことはなくて，割にのんきにやっていました。

ですから，経済・法律は大変だということを学部長会議で言っても，割に通じないところがありまして，京大が東大と同じ日にやるのだったら，われわれも同じ日にやらざるを得ないということを言いますと，教養の先生などは入試問題は作らないぞといって脅すわけですね。それで，こちらも共通一次（いまのセンター試験）だけでも構わない，それでも京大が抜けたところで，西側でやるよりはましだということで。

結局は東と西で分けるのはやめになりまして，今現在の前期・後期というのに突如変わったわけです。それでも，当時はまだ後期日程の人数が少ないと中曽根が怒るということで，文部省はとにかく後期もたくさん採ってくれということで，それもまた文部省と綱引きなんですね。結局，定員の３分の１を後期，前期を３分の２というふうになった。それを夏ごろまでずっとやっていたものですから，入試からなかなか足が洗えなくて，結局，入試に明け暮れたという感じだと思います。

阿部　これまでの阪大に関わるお話に付け加えていただくことはございますか。

新開　特に経済学部あるいは経済学研究科との関係では，印象に残ったというのは，今言ったような，あまり研究と関係ないようなことが印象に残っているということですから，ありませんが。

阿部　先生のご在職中は，私も少しかぶっているわけですが，思い出しますと，国立大学の法人化前の，比較的落ち着いて研究・教育ができていた，いい時代だったという気もしますけれども。

新開　そうですね。法人化の問題は私が辞めてからだと思いますが，その後は大変なことばかりですよね。大学院の重点化というんですか，大学院大学化とか。

阿部　それがまだ続いております。

新開　そうですね。大学院はなかなか大変だと思います。

対外的な活動

阿部　先生は対外的にもいろいろなお仕事をされており，当方で調べさせていただいた限りで

も，文部省学術審議会専門委員―科研費の分科会ですか―，大蔵省外国為替等審議会特別委員，こういった中央官庁の行政・研究のご指導もされていらっしゃいますし，また学界では理論計量経済学会会長などもお務めになっています。こうした学外での活動で印象に残っているということがおありでしたらお話しいただきたいのですが。

新開　その科研費のほうは，金額の少ないのはひょっとしたら審査員を何回かしたかもしれませんが，金額の大きいのは２年間だけ。今おっしゃったのがそれだと思います。文科系なのですが，経済だけではなくて文科系全部を含めた研究が対象で，しかも金額は相当大きいのがあって，その審査というのを２回やりました。

これは分野が違う先生が10人ぐらい集まってやるのですが，とにかく分野が違うところで優劣を付けるというのはできないのですね。経済でもなかなか優劣は付きませんが何とか分かるところが，例えば人類学というのと経済学とどうかと言われてもしかたがない。しかも，出てくる先生は割に自分の分野のことを非常に強く主張される方が多いものですから，とにかく研究費の取り合いなんです。

しかも，申請を見ますと，経済の人というのは書類を作るのが割に不熱心なんですね。それで，割にいいかげんな申請になっていて，ちょっと見ると，フロッピーディスクを部屋いっぱいになるぐらい買うのだというのがあって，これはひどいなと。しかし，あまり経済がひどいと言うと，経済が全部落ちてしまってもいけませんし。

そんなので，どうもあまり実りが少ない審査だったと思います。これを長年やらされたらたまらないなと思ったけれども，みんな２年で交代するそうなので助かりました。

それから，大蔵省の外国為替等審議会というのは，私はそんなにああいう委員をやったから意義があると思っているわけではなくて，率直なところ，履歴書に一つぐらいは審議会の委員が入っていないと寂しいかなということでやったのですが。

当時は，外国為替に関してはあまり問題がなかった時代ですので，審議をするといっても，対立して何かということはほとんどなくて勉強会という感じでした。ですから，割に頻繁にも開かれなくて，そういう意味では審議会の経験はそうあったとは言えないと思います。

だいたい審議会というのは役人が作ったものを承認するというようなもので，それも対立点がある場合は，お役人の人が一人一人の委員にレクチャーをして大変らしいですが，そういうこともなかったということは，結局，無風状態だったということだと思います。それで，何かの機会で委員長が変わった時に私は首になりまして，その後，こういう正式な委員会，審議会というものには関わっておりません。

それ以外は，例えば日銀の研究所の顧問というのですか，アドバイザーのようなこととか，通産省の研究所のアドバイザーとかいろいろやりまして，そういうところは，むしろ審議会というよりは研究としてアドバイスするということですから，割に実りの多い仕事だったと思います。しかし，それもこちらが歳を取ってくると，だんだん話が通じなくなってしまってやめになりました。

学会の会長というのも名誉といえば名誉ですが，結局，われわれの分野では会長というよりは，むしろどれだけの論文を書いて，どれだけの一流の雑誌に発表・掲載されたかということで，しかもこのごろですと，それが幾ら引用されたかというのが一番大事なような感じですね。

私が論文を書いていたころは，引用のことをいう人はあまりいなかったと思います。ただ，それでも将来は引用が大事になるぞというのが分かっていた人もいまして，そういう方は，例えばレフェリーといって，つまり誰が書いた論

文を雑誌に載っけるかどうかという審査を頼まれるわけですが，そうしますと，自分のこの論文を引用すれば通してやるとか，そういうことを。とにかく自分の論文の被引用数を増やしたいというのを当時からやっている人がいました。

アメリカ人はもともとそうだったと思うのですね。ですから，そのころもアメリカでは，そういう被引用数のインデックスなどができたりしています。われわれがやっている経済学部は，比較的そういうのに慣れていると言われていますが，それ以外の文科系は全然そういう発想はありませんね。

阿部　文学部のようにいまだにないところが多いのではないでしょうか，

新開　そうなんです。それと，例えば阿部先生，日本経済史などの場合には，国際的な雑誌といっても，日本の雑誌が一番質が高いわけですから。

阿部　日本経済史の載せてもらえる外国のジャーナルもあるにはあるのですが，今はコンピュータが入りましたので引用回数などがずいぶんはっきり分かるようになってきており，いわゆるインパクトファクターも計算されています。ただ，経済史はそれらによるランキングが，ぐっと下のほうでして，経済学の雑誌としては，ほとんど相手にされていないようです。

新開　日本経済史だったら日本の先生が一番偉いということで，その国際雑誌といってもしかたがない。それから法律の場合，日本の民法・商法の場合，これもあまり英語で論文を書いてもしかたのない分野ですから，結局，経済学とか心理学，人類学も少しそうですが，そういうのがあって，それ以外は，なかなか国際的な雑誌で引用数を誇るというのにはなじまないような感じはありますね。

しかも，引用のほうは，先ほど申しましたように工作をして，自分の引用数が増えるようなことをやる人も結構いますので，どの程度，信用できるかということもありますから，私たちはあまり強くは言いたくないのですが，そういう時代の流れに割に早く乗れたということではないかと思います。

阪大生へのメッセージ

阿部　私どもはインタビューの最後に毎回，現在の大阪大学の学生さんたちに先生方から一言励ましの言葉を頂戴するということにしているのですが，よろしくお願いいたします。

新開　これは学部の学生に対するメッセージと，大学院の学生に対するメッセージとまったく違うわけで。

阿部　両方頂ければ幸いです。

新開　学部の学生の場合は，研究者になる人がいるとしても，ごくわずかでありますから，結局，幅広い教養を身につけて，その中には経済学ももちろん含まれているけれども，特に一生懸命勉強しなさいというつもりはないのですね。むしろ，いろんな人との関係，付き合いの関係とか，何かプロジェクトが，運動部だったらマネジャーとか何かをやって，リーダーシップを身につけるというようなことのほうが大事かな。

それから，先ほども少し出ましたが，コミュニケーションの能力も高めたい。成績のいい人に限って，うまく話ができないとかいうことがありますので，成績がいいのも結構ですが，むしろ世の中に出てから役立つようなスキルを学生のうちから磨いていくのがいい。

それに対して大学院の場合は，大学院を終わってから，いわゆる会社や官庁に行って社会人になるのは別としまして，研究者になるのだったら，やはり最初から国際的な競争ということを念頭に置いて勉強しなければならない。ですから，そういう意味では，最初から世界の学会で活躍することを目標にしてやってほしいということです。

大阪大学（大学院経済学研究科）は，先生の

業績を考えると，たしか文化勲章が２人いらっしゃって，文化功労者が３人ですから，かなりずっと伝統的に質の高い講義はされているはずですし，今でも，例えば今現在の社研というのは，論文の被引用数でいいますと，１人当たりで数えればかなり上位のほうにあるということですから，勉強するのでしたらいくらでも偉い先生はいらっしゃるわけです。ですから，そういう先生を手本にしながら，ぜひともリサーチということを熱心にやってくだされば と思います。

新開陽一名誉教授略歴

1931 年10月　大阪府に生まれる
1951 年３月　大阪府立三国丘高等学校卒業
1955 年３月　大阪大学経済学部卒業
1960 年３月　大阪大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学
1960 年４月　大阪大学経済学部助手
1960 年９月　経済学博士（大阪大学）
1961 年４月　大阪大学経済学部講師
1961 年９月　ペンシルベニア大学経済学部客員研究員（1963 年８月まで）
1965 年４月　大阪大学経済学部助教授
1972 年４月　大阪大学社会経済研究所教授
大阪大学評議員（1974年3月まで）
1976 年５月　大阪大学社会経済研究所所長（1978 年４月まで）
1982 年３月　大阪大学評議員（1984年3月まで）
1984 年４月　大阪大学経済学部教授
1985 年７月　大阪大学経済学部長（1987 年７月まで）
1995 年３月　大阪大学停年退官
1995 年４月　大阪大学名誉教授
大阪国際大学教授（2007 年３月まで）

Memoir of Osaka University talked by Professor Emeritus Yoichi Shinkai

Masaki Kan and Takeshi Abe

This is a record of the talk of Professor Emeritus Yoichi Shinkai related to the history of Osaka University. Professor Shinkai, who was born in 1931, graduated from the newly established Faculty of Economics at Osaka University in 1955, and won the degree of Ph.D. in 1960 at the Graduate School of Economics of the same university. In youth he was taught the significance of a referred article in a famous English journal by Professor Michio Morishima. Professor Shinkai became Assistant Professor in 1960, and further Lecturer in the following year at the above-mentioned faculty. He had collaborated with Professor Lawrence R.Klein, who was awarded Nobel Prize in 1980, at the Faculty of Economics at University of Pennsylvania for two years after September, 1961, accomplishing the predominant achievement. Professor Shinkai was promoted to Associate Professor at Faculty of Economics in 1965, and encountered the so-called student riot in 1968-1969. He moved to the Institute of Social and Economic Research (ISER) at Suita Campus as a professor in 1972. Professor Shinkai worked as the director for two years after April, 1978, making a great effort to construct the new building of ISER. He returned to the Faculty of Economics in 1984, being elected its dean next year. For two years Dean Shinkai had to work hard to tackle the problem of the new way of entrance examination. He retired Osaka University in 1995.